

きゅうり姫 山形県

むかし、あつたけど。

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。

あるとき、おばあさんは川に洗濯に行きました。洗濯をしていると、川上からきゅうりが流れてきました。おばあさんは、きゅうりをひろって家に持つて帰り、糠床(ぬかご)の中に入れておきました。すると、赤ん坊の泣き声がしたので、糠床を見ると、女の赤ん坊が生まれていました。

おじいさんとおばあさんは、その子を育てることにしました。

「なんと名前をつけようか」

「きゅうりから生まれたから、きゅうり姫とつけよう」

きゅうり姫は、むぐ、むぐむぐと大きくなつて、いい娘になりました。

ある日のこと、きゅうり姫は、おばあさんに、

「おばあさん、機織(はたお)りがしたい」といました。

「おまえはまだ小さいから、むりだ」

「そんなことをいわないで、機織りをさせて」

きゅうり姫は、機織りのしたくをしてもらつて、

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織(おり)きる どんきん からん

と歌いながら、いい音を立てて上手に機を織りました。

おじいさんとおばあさんは、裏の畑に仕事をしに出かけるとき、きゅうり姫にいいました。

「きゅうり姫、きゅうり姫。わしらは畑に行くけども、となりのあんまのしゃぐが来て

も戸を開けてはならんぞ。なんば戸を開けろつていつても、戸を開けるなよ」

おじいさんとおばあさんが出かけると、きゅうり姫は、留守番をして、

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

と、機を織っていました。すると、あんまのしゃぐが来て、

「きゅうり姫、戸を開ける。きゅうり姫、戸を開ける」といました。きゅうり姫は、「おじいさんとおばあさんが、戸を開けてはならんつていつたから、開けられない」といました。

「そんなことをいわないで、少し開ける」

「いやだ。開けられない」

「爪だけ開ける。爪だけでいいから、少し開ける」

きゅうり姫は、戸を爪だけ開けました。すると、あんまのしゃぐは、戸をガラツと開けてしまいました。そして、

「きゅうり姫、きゅうり姫。ちょうじやの長者野のむこうに、桃ももをもぎに行こう」とさそいました。きゅうり姫は、

「行かない。おじいさんとおばあさんにしかられる」と答えました。あんまのしゃぐは、「そんなことをいわないで、げたをはいていこう」といました。

「げたをはいたら、カツカツって音がして、おじいさんとおばあさんに聞こえる」「じゃあ、ぞうりをはいていこう」

「ぞうりをはいたら、スッパタラ、スッパタラって音がして、聞こえる」

「じゃあ、おれの背中におぶさつて行こう」

「おまえの背中はとげが生えてて、痛いからいやだ」

「じゃあ、むしろを着るから、おれの背中におぶされ」

あんまのしゃぐがむしろを着たので、きゅうり姫は、あんまのしゃぐの背中におぶさつて、長者野のむこうに行きました。

長者野のむこうには桃がいっぱいになつていました。あんまのしゃぐは、

「おれが登つてもいでやる」といつて、桃の木に登つていきました。そして、自分は、よくうれたおいしい桃を食べて、きゅうり姫には、まずい桃ばかりボダリ、ボダリと落しました。

「うまい桃を投げておくれ」と、きゅうり姫がいようと、あんまのしゃぐは、「これか」といつて、かじった桃を、ボン、ボンと投げてよこしました。

「かじった桃はいやだ」と、いくらいつても、かじって投げてよこしました。

「これではなくて、かじっていない桃を食べたい」と、きゅうり姫がいふと、あんまのしゃぐは、

「そうちか、そうちか。じやあ、おまえ、自分で登つてとれ」といひて、おりてきました。  
そこで、きゅうり姫は、桃の木に登つていきました。すると、あんまのしゃぐが、下から、

「きゅうり姫、そうちの桃がうまいぞ」といひました。

「これか」

「いいや。もつと上のだ」

「これか」

「もう少し、もう少し」

きゅうり姫は、ずんずん登つて枝の先までいきました。

「きゅうり姫、それだ」

あんまのしゃぐがいいました。きゅうり姫は、桃をもじうと手をのばしたひょうしに、木から落ちて死んでしました。

あんまのしゃぐは、きゅうり姫の顔の皮をずらりとはいひで、自分の顔にかぶつてきゅうり姫に化けました。そして、おじいさんとおばあさんの家に行つて、機織りをしていました。あんまのしゃぐは、機織りがへたで、

ドダリ、バダリ、ドダリ、バダリ  
と音がしました。

おじいさんとおばあさんは、帰つてきて、

「なんだろう。きゅうり姫は、機織りがへたになつたよ。いつもなら、

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

つて、音がするのに、きょうは、

ドダリ、バダリ、ドダリ、バダリ

と音がする」といひました。

あんまのしゃぐは、

「手にまめができる痛いから」といひました。

あくる朝、おじいさんとおばあさんが、流しで顔を洗つてはいるが、鳥が飛んできて、  
きゅうり姫の乗り車さ　あんまのしゃぐ　ぶぢ乗つた

ホツホツ　ホケチヨ

きゅうり姫の乗り車さ　あんまのしゃぐ　ぶぢ乗つた

ホツホツ　ホケチヨ

と鳴きました。

おじいさんが、

「きゅうり姫、きゅうり姫。おまえも顔を洗え」というと、きゅうり姫に化けたあんま  
のしゃぐが出てきて、顔を洗いましたが、指一本でコスコスと顔をなでるだけです。お  
ばあさんは、

「なんだ、きゅうり姫。そんな洗いかたはだめだ」といつて、きゅうり姫の顔をこすり  
ました。すると、皮がはげて、あんまのしゃぐになりました。

おじいさんとおばあさんは、

「こんちくしよう。にくいあんまのしゃぐめ」といつて、萱かやあんまのしゃぐをジャギ  
ジャギとついて殺してしまいました。

だから、今でも、萱の根元は赤いのだそうです。  
どんぺからんこ・ねでは

村上郁再話

資料『関澤幸右衛門昔話集』野村純一編／瑞木書房